広報なか

No.108
●発行日／平成26年１月１日発行
●発　行／那珂市
●編　集／秘書広聴課
広報グループ
〒311ー0192
茨城県那珂市福田1819ー5
●ホームページURL（携帯可）／
http://www.city.naka.lg.jp
●メールアドレス／
hisho-k@city.naka.lg.jp

2014
1

目次
CONTENTS

2 新春のごあいさつ
4 水鳥
8 受章おめでとうございます
9 那珂市総合防災訓練
10 公民館まつり　ほか
11 那珂市消費生活センターです
15 那珂市内放射線量の測定状況
16 まちの話題
18 Information　ほか
20 ナカマロちゃん、表紙の裏側　ほか

よいしょ！よいしょ！おいしいお餅になってね（芳野幼稚園：防火餅つき会）

水鳥 18

～徳川光圀と那珂市～

水戸藩初代藩主・徳川頼房の三男徳川光圀は名君の誉れが高く、藩主就任前後から西山荘での隠居生活をとおして、数々のエピソードが語り継がれています。今回は、それらの中から那珂市に関することがらを抜き出し、整理してみました。「光圀伝」のＮＨＫの大河ドラマ化が期待されている今日でもあり、一つの話題として紹介してみます。

徳川光圀（義公）の本質

光圀は、死体などが浮く浅草川を渡り切り、父頼房から褒美の短刀を拝領するなど幼少期からの剛毅な面、吉原など江戸市内を徘徊する青年期の無頼な面を見せています。その遊び人的生活が一変する転機となったのは、18歳で中国の歴史書『史記』の「伯夷伝」を読んだことでした。中でも、兄伯夷と弟叔斉の兄弟が互いに家督を譲りあったこと、兄弟が周の武王が臣下として主君である殷の紂王に反逆し国家を転覆させる革命を否定したことは、光圀にとって衝撃的であり、光圀が生涯をかけて解決する大きな課題でした。それらは、兄頼重の子綱條を第3代の藩主にしたこと、『大日本史』を編さんして日本の主君は天皇であり、将軍や藩主・領民はその臣下であることを明らかにしたことで解決します。この君臣についてのとらえ方の違いが、幕末水戸藩の悲劇になっていきます。

徳川光圀像（義烈館蔵）

那珂市内の社寺改革

改革の眼目は、寺院と神社を明確に区別すること。由緒が不明であり、また不行跡な祭祀者や住職などのいた神社や寺院を整理したこと、神社を一村に一社としたことなどでした。ただし、由緒ある神社や寺院は手厚く保護しました。八幡神社を廃止したいわゆる「八幡改め」は、臣下として天皇（応神）を祀ることは不敬であること、佐竹氏の信仰対象である八幡神社は否定したことからなどとは言われますが、水戸の八幡宮は一時城下から離れ、額田の八幡神社は鹿嶋神社と合体するなど由緒の明らかなものは潰さずに保護されています。

整理の実態を那珂市内の例で見てみます。はじめに神社の改めですが、常陸一の宮・二の宮・三の宮である鹿島・静・吉田に改称されています。

①吉田神社へ

白鳥八幡（向山）、駒形八幡（横堀）、若宮八幡（東木倉）、若宮八幡（下江戸）

②鹿島神社へ

八幡（杉）

③静神社へ

八幡（堤）、八幡（田崎）

④その他の改称・整理

○鹿島・八幡（門部）を鹿島静神社

○鹿島・八幡（大内）を鹿島諏訪神社

○鹿島・八幡（菅谷両宮）の八幡社を分離

○沼尾（福田）を春日神社

○鹿島・三嶋・駒形八幡・若宮八幡（後台）を鹿島三島神社

○諏訪・諏訪八幡（西木倉）を諏訪神社

○国神・若宮・弓矢八幡神社（戸）を国神神社

○駒形神社（南酒出）の神宮寺常勝院を分離

○瀧神社（下大賀）は弘願寺移転に伴い現在地へ

○額田鹿嶋八幡神社

光圀が奉納した什器類があり、本殿前にはお手植えの真榊もあります。その後の水戸藩の崇敬は、幕末水戸藩の碩学会沢正志斎自筆の扁額「額田神宮」が奉納されていることでも明らかです。

額田まつりの鹿嶋八幡神社

次に寺院です。ゆかりの寺院や整理された寺院、引き寺された主な寺院をあげてみます。

○阿弥陀寺（浄土真宗：額田南郷）

光圀は元禄11年（1698）3月9日に太田久昌寺住職日乗上人と訪問しています。寺伝によると、境内の見事なしだれ桜はこの時に光圀がお手植えされたものとされています。また、境内墓地には鈴木市十郎に嫁した光圀の養女万姫の墓もあります。

万姫墓所

○引接寺（浄土宗：額田南郷）

元あった心岩（岸）寺に代わって元禄9年（1696）に光圀により建立された寺で、本尊阿弥陀如来は高萩の八幡宮の神仏分離により2体の脇侍とともに光圀から拝領したものです。脇侍はやや膝を折り浄土から来迎の姿勢をとっています。光圀は、本尊の背面にその由来を記しています。

阿弥陀如来三像

○毘盧遮那寺（真言宗：額田北郷）

光圀の命により観音寺と遮那寺とを併せて毘盧遮那寺とし向山に移されましたが、正徳元年（1711）に現在地に移されました。室町時代に額田城主小野崎善通により奉納された大般若経を所蔵しており、毎年正月に行われる大般若会法要は荘厳な雰囲気の中で行われます。

大般若会法要

○不動院（真言宗：菅谷）

光圀が寺の再興にあたって武田山不動院大聖寺と命名しました。光圀が参詣した際に『きけかしと　まつよりいとも長き日を　くらしかねたる花の木のもと』と詠んでいます。寺には当時から桜があったものと思われます。現在は茨城県指定天然記念物となっている見事なカヤノキが聳えています。

不動院のカヤノキ

○清水寺（曹洞宗：東木倉）

地方の住民は京都の清水まではなかなか行けない時代、東木倉清水の地に京都の清水寺にちなんだ名前を付けて光圀が建立したものです。光圀が帰依した明からの亡命僧心越が開山で、その弟子で水戸の祇園寺の僧呉曇を住職としました。本尊は心越が明から持参した白衣観音（焼失）で、安産子育て信仰から多くの参拝者を集めました。光圀は次の和歌を詠んでいます。

『ここもまた　くにこそかわれ山城の　心のすめるおなし清水』

「村絵図」に
描かれた清水寺境内

○一乗院（真言宗：飯田）

元は水戸の台吉田にあった佐竹氏建立の寺でしたが、光圀により飯田村久福寺の跡に引き寺されました。光圀は、元禄10年（1697）3月18日の多聞天入仏供養に参列し、飯田村庄屋大和田源衛門宅に宿泊しています。寺には、水戸吉田村時代に奉納されたことを示す大般若経を収める唐櫃が伝わっています。

○静安寺（臨済宗）

室町時代初期に佐竹義篤が父貞義の菩提を弔うために静神社の神宮寺として建立したが、光圀の神仏分離の方針により寛文8年（1668）飯田村へ引き寺され、さらに元禄7年（1694）に戸崎村洞前溜池上方へと引き寺されました。しかし、天保期の斉昭の社寺改革により廃寺となっています。

大般若経を収める唐櫃

○蒼龍寺（曹洞宗：南酒出）

南酒出城内にあった高泰院の跡に水戸仙波から引き寺されました。蒼龍寺は水戸城の鬼門にあたる城東にあり、その後仙波払沢に移っていました。毎年11月に献穀祭である「星祭り」が行われ、那珂市指定天然記念物のカヤの巨樹（市指定文化財）が聳えています。

蒼龍寺のカヤの巨樹

○弘願寺（臨済宗：下大賀）

南北朝時代に佐竹貞義が静神社境内に神宮寺として建立した寺で、光圀の神仏分離策により下大賀に移りました。天保期に廃寺となりましたが、明治初期に復活しました。茨城県指定文化財である雪村画の「滝見観音図」は、常陸太田市の正宗寺「滝見観音図」の元となったものとされ大変貴重なものです。境内の「くすぐり地蔵尊」は、病に悩む庶民が、病める患部に当たる地蔵尊の部位を撫でると治るとされ、多くの信仰を集めています。

くすぐり地蔵尊

光圀と静神社・常福寺

①静神社

光圀は、本殿改修をしていた寛文7年（1767）にヒノキの根元から「静神宮印」の銅印（国指定重要文化財）を発見し、その保存のために漆塗りの箱を作り由来記を自筆しています。光圀の子綱條は、父光圀の遺志を受け継いで「三十六歌仙」の額を奉納しています。

銅印と光圀作印笥

②常福寺（浄土宗：瓜連）

常福寺は、徳川家康から寺領100石を拝領し、初の水戸城主武田信吉の導師を務め、水戸藩徳川家初代頼房が伽藍を修築しています。光圀は、頼房の位牌を安置して水戸徳川家の菩提所とし、本米崎の上宮寺から交換して得た「拾遺古徳伝」（国指定文化財）を寄進した上、朝廷に奏請して常に紫の法衣を着する常紫衣の綸旨を賜っています。光圀が刺殺した家老藤井紋太夫の髑髏盃なるものが密かに伝えられています。また、境内墓地には初代水戸藩主頼房の代から招かれ家老を務めた山野辺家の墓所があり、日立助川へ移るまでの当主らの巨大な五輪塔が並んでいます。

山野辺家墓所

那珂市域の棚倉街道周辺

①浄鑑院常福寺（浄土宗：向山）

光圀が徳川家康の五男で伯父武田信吉の菩提を弔うために、水戸と太田の間の景勝地を選んで建立した寺で、京都の知恩院に似せた大伽藍でありました。寺の僧侶も数百人が修行に励んでいたともいわれています。歴代藩主の参拝はもちろん、幕末の志士吉田松陰も参詣しているこの寺、那珂二中はその境内の一部です。元禄5年（1692）3月24日、光圀は寺に額田の阿弥陀寺・心岸寺、西山荘近くの久昌寺住職らを迎えて宴を開いています。幕末に廃寺となり、現在は住職たち数人の墓碑が残されています。

住職たちの墓碑

②菅谷横須賀家

光圀は、元禄12年（1698）9月24日に横須賀家を訪問しています。その前の晩の23日には延命院（現廃寺）へ宿泊していることから、寺は宿泊所にもなっていたことがわかります。横須賀家は周辺の村々の庄屋を束ね、藩有林を管理する山横目の職を務めていました。家には、光圀が好んだ初茸や西山荘の周辺へ植える桃の苗木を周辺の村から集めて送るようにと、光圀の家来から指示された手紙が数点伝えられています。主人の勘兵衛は、立ち寄った光圀をそば切りのご馳走などで接待、光圀も時には江戸土産のお椀やキセルを与えています。

③額田鈴木家

江戸の吉原で光圀と交流を結んだ鈴木市十郎は、光圀の養女万姫を嫁として迎えました。元禄5年（1692）9月5日、光圀は久昌寺住職日乗上人と訪問しています。鈴木家には光圀を迎えるために建てられた書院が現存し、葵の紋をつけた什器類も伝えられています。光圀お手植えのモチノキの双樹も珍しいものです。万姫の墓は阿弥陀寺に在り、最近鈴木家により説明板が設置されました。鈴木家7代市十郎世美（櫟堂）の『鈴木氏記録』には、9代藩主斉昭訪問の詳細が記録されています。

鈴木氏記録
（鈴木とし子氏蔵）

鈴木家書院

④飯田大和田家

光圀は、飯田村の一乗院との関係から庄屋である大和田源衛門宅をしばしば訪れています。迎えた大和田家には、光圀のために誂え用意した手あぶり用の火鉢が現存しています。当主はもちろん、夫人も子どもたちも光圀へのお目見えが許されていました。

火鉢（大和田勝規氏蔵）

西山荘からの巡村

①戸村

光圀が那珂西（城里町）へ参る時に戸村の渡し場近くの河原畠を見渡し、ある畑を指さして案内役の庄屋に、「あの地は真桑瓜にふさわしい地質であろう、仕付けて西山荘へ納めよ」との命令でした。結果はすこぶる美味な真桑瓜、念のために来年もと仕付けるとさらに良い味でありました。それにより、その畑は村役人に配当されることとなり「お瓜畠」と称したといわれています。

②岩崎堰と小場江堰

二つの堰とも光圀の父頼房の晩年の造成です。この堰から瓜連・門部地区に流れる岩崎用水と那珂川流域に流れる小場江用水は、光圀時代にはさらに整備され、また新田開発もさらに進みました。これには永田茂衛門・勘衛門（号は円水）・八郎兵衛の永田家3代にわたる功労と民政担当の奉行望月五郎左衛門恒隆や技術指導の平賀保秀らの存在が大きな力となっていました。戸村の渡しにさしかかった光圀は、小場江用水がもたらした美田を満足して見渡したことでありましょう。戸崎の洞前溜池も永田茂衛門らの掘るところです。

戸村地域を流れる
小場江用水

③菅谷

㈠病馬のこと。元禄13年（1700）10月、光圀は菅谷を通ったおりに脚を痛めた馬を農耕に使っていた農夫に出あいました。気の毒に思った光圀は、お供の御厨又衛門に命じて駄馬の丈夫な馬を水戸城下から求め与えました。農夫の病馬は、放して水戸藩の小金の牧（千葉県）に送りました。大能の牧（高萩）はオオカミが数多いて危険であるからとの配慮でありました。ほかにも、老馬を使役していた菅谷村の農夫に健馬を与えた話も伝わっています。

㈡菅谷街道松並木のこと。幕末に加藤寛齋が記録した「常陸国北郡里程間数之記」には棚倉街道の松並木が描かれていますが、光圀の当時から中台から額田にかけての街道は見事な松並木であったと思われます。逸話によると、この並木街道の菅谷において笠をかぶった隠密らしき者に手招きされた光圀は、お供を残して横道に入り何やら密談の後、何くわぬ顔をして戻ってきたとのこと。光圀も秘密持ちであったことの一端を物語っています。

加藤寛齋が記録した額田南郷高岡付近。街道の黒部分は松の樹木群。

光圀アラカルト

○根本正と義公壁書

東木倉村から代議士となった根本正は、光圀が示したとされる「義公壁書」を生涯の指針として大切にしていました。それは名刺の裏に印刷して日頃の活動に用いていたことにも表れています。生家の根本喜代寿氏宅には、根本正自筆の壁書が軸装されて残っています。壁書の写しは、飯田の大和田家文書および中台の石川家文書の中にも残っています。

壁書はおよそ次の9か条からなっています。「苦は楽しみの種、楽は苦の種と知れ」「子ほどに親を思え」「主人と親の教えを守れ」「掟を守れ、火に注意、恩を忘れることなかれ」「欲と色と酒とをかたきと知れ」「朝寝すべからず、話の長座すべからず」「小なることは分別せよ、大なることに驚くべからず」「九分は足らず、十分はこぼれることと知れ」「分別は堪忍にあることを知れ」（要約）

根本正は生涯禁酒を通したようですが、光圀は酒豪であったようです。いくら飲んでも酔いつぶれることはなく、盃を交わした者、その数までよく覚えていたそうで「人は酒に飲まれるが、義公は酒を飲む人であった」といわれています。また、「酒は人の気を助けて壮にする、しかし酒を恃んで盛んなる気は真の勇気ではない。醒めてから後悔する。場所をわきまえて時には禁酒とすべし」「寒夜の酒は春色のごとし、酒を楽しむことだ」など酒飲みの在り方も教えています。

「義公壁書」（根本正筆）
（根本喜代寿氏蔵）

問い合わせ　歴史民俗資料館　☎297・0080